1学年通信
Dreams come true

山形県立米沢興譲館高等学校
１学年　第４６号
２０１５.１２．１７（木）発行

進研模試の結果が返却されました！

文責 横山

１１月に実施した全国学力模擬試験の結果が届きました。全国模試は７月に次いで２回目となりますが、７月は正直に言うと「中学時の財産」を数値化したものです。多くの１年生諸君が感じたように「あまり良くない」結果でした。これは山形県のみならず、東北各県にも共通する傾向です。学力試験は国数英の３教科で行いましたが、特に「英語」についてはその傾向が強く出ます。それは、はっきり言うと「都市部と地方の差」です。今回１１月の米興各教科トップ者のデータを見ると

米興１年生各教科１位	国　語	数　学	英　語
山形県順位(2550 人中)	４位	３位	２位
全国順位　(49 万人中)	６８７位	５０４位	４６３５位

となっており、山形県順位に対して全国順位は、英語で１桁異なることがわかります。これは私的な分析ですが、 大きく２つの要因が考えられます。１つは幼少期からの教育です。都市部では「お受験」が幼稚園や小学校からすでに始まります。そのような学校は当然のように英語教育に熱心です。また、塾やＥＣＣなど学校外の学習環境が充実していることもあるでしょう。２つ目は、通常の生活エリアにごく当たり前に外国の方が多数おられることです。私の愛する秋葉原は、すれ違う人の半分以上は外国人です。また、幼少期を海外で過ごした帰国子女も珍しくはありません。そのような生活環境では、英語を含めた外国語が身近であるため「必要だワ！」という意識が自然と芽生えるような気がします。「じゃあ英語は全国に追いつけないの？」と悲観する必要はありません。これは今始まったことでは無く、私が(おそらく諸君のご両親が)高校生だった頃からそうでした。ですから全国区で戦うため、米興の英語は(私は前山主任から３年間お習いしましたが)強烈なものでした。スタートからして、入学式の次の日から「英単テスト」でその日の放課後は集められて説教です。授業前のテストで合格しないと「授業中は廊下で正座」も常だったので、私はあまり英語の授業に出ていません。私はあまりにも田舎者で大学受験について無知(というか現実を知ることを避けていたかもしれません)だったので、英語の重要性に気づくこと無く、頑張ろうともしなかったのでモノになりませんでした。今思えば、もったいないことをしたと反省しています。

英語が得意であれば大学受験はもちろん有利ですが、学術書やネットも英文の原文で読むことができます。今回の南北アメリカの旅行でも、もっと多くの人と出会い交流を深めることができたかもしれません。諸君の時代は「いわんや〇〇をや」です。英語が特殊技術でなく「あたり前」な世の中になりました。ですから、私達やご両親が学んだ頃以上に英語を深く濃く学ばなければなりません。私はモノにできなかったけれど、当時の同級生の多くは必死に(または楽しんで)英語を学び、全国トップクラスの実力を有するに至りました。今の３年生や今までの先輩方も同じです。諸君は、あと丁度２年後の「大学受験」までに英語を完成させなくてなりません。また、途中経過として１年後の２年生１月の「実用英語技能検定」の２級取得が目標です。英検２級≒センター英語 140 点位の実力と言われています。何だか英語だけで多くの紙面を使ってしまいました。それほどに、高校の学びの中で英語の占める割合≒重要性は高いということです。頑張れ米興生！

次は国語です。こちらは英語と逆で、山形県の成績は全国平均を上回ります。本県では幼い頃から「絵本の読み聞かせ」が習慣化されています。また、小中学校では音読を重視していますし、無着成恭先生「山びこ学校」のように書くことを重んじています。総じて「言葉を大切にする文化」が根付いていると言えます。これは、先の英語と相反するのですが「まず母国語をキチンと習熟すること」が何より大切だとする考え方だと思います。また、豊かな自然や四季の移り変わりを肌で感じることで、感受性高い精神が育まれているのかもしれません。

さて、最後は私の数学です。数学も地方は負けています。数学は言語と違い、三角比とか確率のように、多くの分野があり、その分野ごとに学ぶべきことも多く、学びに時間のかかる教科です。高校の３年間で文系はＩＡⅡＢの４冊、理系では数Ⅲも学びますから、その教科書の内容だけでもかなりの量です。この点において、来春開校する東桜学館のような「中高一貫６年教育」に大きなメリットがあります。中学時に高校の内容を学びますから、高２では理系であっても教科書が終了しています。高３の１年間全てを受験勉強に費やすことができます。そういった状況を何とかするため県教育委員会は「難関大セミナー」などを企画して、数学や英語の講習を行っているのです。結びに、１年生諸君を含めて米興生は、入学時の学力は決して高いものではありません。しかし、その後の「伸長」は極めてハイレベルです。都市部のように早咲きでないものの、最後は大きな花を咲かせます。つまり諸君は成熟するに時間のかかる植物のようなものです。ですから「自らの SEEDs 」を信じて、これからも地道に努力を続けていきましょう。

模擬試験の成績の欄に「偏差値」というものがあります。高校受験でも出会っている言葉だと思いますが、実際にどのようにして求めるのかを知る人は少ないのではないでしょうか。最近、数学Ⅰ「データの分析」を学びましたので、丁度いい機会です。ここで偏差値の話をします。

大学入試(受験)の合格条件は、試験を受けた得点上位者から合格が決められ定員数に達した時点でそれ以下の得点者は全て不合格になります。英語検定のように、合格点が決まっていて、それ以上の得点を取った人全てが合格できるわけではありません。ですから「受験する際に自分がどの位の位置にいるのか」がとても重要になってきます。それを教えてくれるのが偏差値になります。試験の「点数だけ」では自分の実力がわからないのが受験のややこしいところです。 試験は毎回問題が異なるので、点数が毎回違ってきます。少し具体的に説明します。下の表は試験を２回受けた結果です。

	1回目	2回目
点数	90点	50点
平均点	80点	30点

点数だけみると１回目は90点で、２回目は50点ですので、１回目の方が優秀に感じます。ここで平均点に注目してください。１回目は80点、２回目は30点です。つまり１回目の試験は大変簡単な試験で、２回目の試験は難しかった試験となります。順位で考えればあきらかに２回目の試験の方が順位がよかったでしょう。となると単純に点数だけでは自分の実力がわかりません。それでは順位では？と思った方がいるかもしれません。確かに順位がわかれば自分の実力が何番目か点数に左右されずにわかります。ですが、実力をきちんと把握するには毎回受験と同じ条件が必要になってきます。同じ学校を志望する人や人数などを本番まで同じ条件にすることは不可能ですから、現実的な数字ではありません。偏差値はこれらの問題を全てクリアして実力を教えてくれます。問題の難しさや参加人数などに惑わされずに自分の学力位置を教えてくれるのが偏差値です。偏差値は「平均を50としたとき、自分は平均からどれ位離れているか」を数値化したものになります。具体的な計算方法は次の通りです。

「偏差値＝(得点－平均点)÷標準偏差×10＋50」

標準偏差は分散の正の平方根です。これはデータのばらつきの範囲を示しています。

(例)10人の生徒が100点満点のテストを受けた結果

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
点数	80点	50点	40点	20点	30点	70点	55点	50点	45点	55点

1.平均点を求める

平均点は，得点をすべて足して，人数で割れば求められます。
(80+50+40+20+30+70+55+50+45+55) ÷ 10 ＝ 49.5　平均点は49.5点です。

2.標準偏差を求める

標準偏差は分散の平方根になります。
①：各数字から平均値をそれぞれ引く
②：①で求めた各数字を、それぞれ２乗する
③：②求めた各数字を、すべて合計する
④：③で合計した数字を、元々の数字の個数で割る
⑤：④で求めた値に√をつける

■①～③の式

$\{(80-49.5)^2+(50-49.5)^2\times2+(40-49.5)^2+(20-49.5)^2+(30-49.5)^2+(70-49.5)^2+(55-49.5)^2\times2+(45-49.5)^2=2772.5\}$

■④の式　2772.5÷10＝277.25
■⑤の式　√277.25＝16.650…≒16.6

3.偏差値を求める「偏差値＝(得点－平均点)÷標準偏差×10＋50」

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
点数	80点	50点	40点	20点	30点	70点	55点	50点	45点	55点
偏差値	68	50	44	32	38	62	53	50	47	53

偏差値はこのように求めることができます。受験生なら誰でも知っている偏差値ですが、偏差値の意味を知り求めることができる受験生は少ない。それを知った諸君は「受験のプロ！」です。